

圖aの如くなるも極めて僅かなる傾斜を得るに至れば輪は延びてbの如き形態となる。

前四者を通覽するにいつれも其稜の排列は岩石の種類によりて決定せられず乗鞍のラピリの如きも鏡下に檢すれば種々なる安山岩にして白馬館南方のものも亦綠泥片岩若くは千枚

岩の角礫の混合物たり、從つて畝及中間の岩石はその比重に關係なく全くその礫の大きによりて畝となり又中間充填物となる。

之等構造土の横斷面は第三圖に示すが如く礫の下に甚だ細かき褐色の土壤ありて水を含めば礫は全くその上に浮揚せるが如く一步踏み込めば一尺近くも沈下する所あり大雨又は雪溶けに際し大規模なるソリフラクションを生ずる時は恐らくこの土壤は水により飽和せられて甚だ流動し易き物質となるべし。駒草の

第三圖



西遊夢錄

(九)

瀧川規一

蘇國の部

(X) エナンバラ及び其附近

栽培に適するを以て飛驒小屋(乗鞍絶頂小舎)の者は摩利支天に之を栽培す之の上に載る礫は圖の如く大なるものは小なるものよりより以上沈下せり。

之等構造土ある附近は所謂フエルセンメーアにしてソリフラクションの盛なるは言を待たず、かくの如き高所ならずともよく觀察すれば崖錐の表面にも亦大小の礫區別排列して甚だよく構造土に似たる所あり而してこの崖錐のものは少く意味を異にせるものなるが如し。

平坦面には輪狀に傾斜面には畝狀に又この二者の中間の傾斜には二者の中間の形狀のものを生ず、而して並行畝のものは傾斜の大小によりその鮮明さを異にす。礫の下には細泥ありいつれも構造土成因の研究に對する想像の材料たらざるはなきも之等地方の構造土成生の原因に關する結論を下し得ざるを遺憾とす。乗鞍岳にかく構造土のよく發達せるはラピリがこの土壤を作るに適したる結果ならん。

(アーサス・シート)臥せる獅子の姿をなせるこの山の山麓の清泉は登る者の耳を洗ふに足るであらうが、肉食國の人々

はそんな生温るい表現では承知しない。民謡には「血に渴えたるもの、戀に疲れたるもの、狩くらに咽喉の渴えを覺えたる者は來て飲みましやんせ」と云つて、戀の泉生命の泉となつてゐる。咽喉以外に渴を覺えるには餘りに年老い、餘りに文化の洗練を経て來てゐる極東人も、まで來た以上一掬の淡き味を試みる。試みて後に石柱空しく蒼空に向つて聳え立ちて傳説を暗示する尼院跡の懸崖に足は自づと向ふ。横はれる石柱に腰を鉤ろして一ふくの煙草を煙らす。頂上迄の道を教へて呉れた羊飼がいつの程か近づき來つて、煙草火を借せと云ふ。やがて二人は尼院の廢墟にあつて談を東洋問題に走せる。羊飼は劈頭已が國民性を二三度も繰り返へして聞き質す日東國人なることを再三答へても猶怪訝な面持ちである。その理由を問へば支人にして日人なりと僞稱した經驗を有するからであると彼は答へる。當時支那に於ける英人排斥について彼は言を進めて曰ふ。「他國人が支那に於て自國內に於けるよりも以上に尊大な面をして横行闊歩しあたりの人民をおどしつけてゐる。若しそれが依地を異にし大ブリテンの天地に極東の有色人が同様に横行すると想像するならば、吾々はそれを一日も看過するであらうか。だから支那人の英人排斥には充分同情すべき點がある。英人丈けでない。米人もさうだ。その他の白人悉くさうだ。それに近來は同じ有色の日人までもその眞似をしてゐるお前はと思ふ。お前の國で若し白人がそんなアリ（威嚇）をやつたらどうする。支那人の如く必ず排斥するであらう」と論理を進める。「遺憾ながら白人

の横行跋扈は支那ばかりではない。東洋に於ける凡ゆる陸地は白人のさばる影で蔽はれてゐる。地中海を超えて東及び南に足を踏み入れる時白人の蹂躪する靴の下に呻きの聲を聞かぬ土地はない。

肉體的にも精神的にも有色人種は白人種に壓迫されて呻吟の聲を擧げてゐるのみで、何等なす處がない。お前の議論も尤なやうではあるが、アングロサクソンやスコット種族がその範を他の白人に示してゐるのである。一旦示された範を破ることは今の處六つかしい。その位同情あるならば何故に東洋の天地から白人が悉く撤退せぬか。英米人第一にその範を示しては如何」と反駁する。彼は急に言を謹嚴にして「お前は政治家か？」と問ふ。「否」と答へる。「一國を左右する勢力をもたぬ人間が口喧しい議論をしても駄目であるが、俺の云ふ處にもお前の云ふ處にも半々の眞理がある」と彼は都合のよいことを云ふ。煙草火が飛んでもない外交論となつた。お蔭で日は既に西に傾いてゐる。羊をまとめて彼も歸宅する時刻となる。谿谷に道を失つては旅の本意に背くとあきらめて宿に歸る。

翌朝またも同じ道をとつて廢墟の附近より頂上さして上る昨日の羊飼はまた同じ處に居つて羊の番をしてゐる。やがて近在の人とも覺しき小柄の中年の紳士が急ぎ足に後から登つて來る。「マツチをもつてゐないか」と先方から聲をかける。「マツチ」を出すと、煙草を一本差し出し呉れて「お前の話は麓の羊飼から聞いた。話が面白いので實は今日懸々來たのだ。

昨日あの羊飼の男とお前が別れる時明朝必ず山頂に登ると云つたさうな。東洋人は言を實にしないと豫れてから聞いてゐたから、お前が今朝再び来るとは必ずしも豫期してゐなかつた。今朝こゝに來て見ると言に違はずお前は來てゐる。お前は果して日本人か。條約履行に忠實なのは日本人だとは人の云ふ處であるが、それでお前は日本人に相異ない。と云ふ妙な論法もあつたものである。「自分は決して羊飼に今朝來ることを約束しない。」

只自分の希望を述べたまでである。プロミスとホープとは大に違ふ。然しよい道伴れを得たのはうれしい」と、答へるその男は得意さうに云ふ。「俺の兄弟がこの山麓の自動車道を設計したので、兄弟の名がついてゐる。山向ふに俺の家がある。暇があるなら來訪せよ。俺はお前と一緒に山頂まで行かう。俺は毎日のやうに朝早くこの山にのぼつてエザンバラ市を下瞰することを唯一の樂にしてゐる。都會人はこの新鮮な空氣と廣潤なる天空とを味ふことを知らない。お前は登山が好きか。エザンバラ市には年々米人が澤山見物に來る。お前の國人も澤山來る。然しこの山に登るものは至つて少い。俺も一生のうちには是非お前の國に行きたい。この紳士は一見舊知のやうに馴々しく話を續ける。汗を拭ひつゝ谷を渡り山の背を傳つて淺緑の萌え草を踏みつゝ遂に頂上の人となる。樹木とてない若草山である。頂上には岩石が相重なり山の頂上らしき感じを與へる。山巔には方向を示す放射線を金屬板に刻しその方向線の雲間に見ゆる山峯の形と名とを記した方

向標臺が据えられてゐる。既に數組の男女の登山者がある。件の紳士は親切にも方向臺の教へる吾や眼下に見おろすエザンバラ市の建築物、城壁や宮殿、足下の射的場 Salisbury Crags の岩壁、Dumbiedykes の小屋、及び Echoing Rock など一々記憶すら混雜な程數々のことを教へて呉れる。遂にはノートを出して書いて呉れと依頼する。凡そ記念に値する程の旅行には一定の型のノート若くは紙を用意して斯うした場合に先方に書いて貰つておくに限る。豫れて鹿兒島立つ以前に先輩よりそれを聞きながら、後にまでも保存するに足る材料をとゝのへたに抱らず、門出の際遂に置き忘れたのは終生の遺憾である。兎に角今は持ち合はせのノートをとり出して地名山名を書いて貰ふ。

歸路一直線に射的場の盆凹地に向つて懸崖を下るが最捷徑であると件の紳士は教へる。些か躊躇してゐると彼も亦道しるべに同伴せんと云ふ。ヒースやかざ柴の根をもち乍ら稍もすると迂り落ちんとする身を支へつゝくだり行く。「返響岩」と稱せらるゝ邊も過ぎて更に Salisbury の岩の屏風の如き岩列を目標にして、豫定の如く下へ下へと下り行く。途中に小さき凹地がある。倭樹にかくれて壁岩の下道を登る人々には目にとまらざる處である。吾々はその凹地を横ぎられば下に降ることが出來ない。而かも凹地の上の岩角から三四尺を凹底に飛び降りなければならぬ。先導の紳士は飛び降りる、吾も殆ど同時にとび降る。降りるや否や二人共に時を同じくして異口同音にオーと呼ぶ。

オーと云ふ呼び方は物おちした聲にはあらで餘りのことに飽氣にとられた聲である。と云ふは吾等二人が不意打ちにとび降りたが爲めに Venus と Adonis とが事樂の千金の一刻を眼前に掻き亂したが爲めである。銀鞍に跨るヴィナスの女神はさても異邦人同邦人の手前、横隊のアドニスに道をハッチング・キヤップで蔽ふ。銀鞍を去りて勝のヴィナスに道を譲つて貰はなければ吾等二人は今しも下り来りし懸崖をくだることが出来ない。また他にとるべき道もない。まして再び登ることは出来ない。若きヴィナスは大膽にも *Wait a minute* と云ふ。やがてヴィナスの云ふがまゝに待つてはゐたが、一向道を譲る氣配がない。依然として銀鞍を去らぬ。同伴の紳士は *What a shame!* と大喝一聲し余に向つて「お前の國ではこんなことは一切ないと聞いてゐる。近來戦後の風潮には國人齊しく眉をひそめてゐる」とこれ聞えよがしに聲高に云ふ。吾々二人は豫定の道をとつて射的場に出づる。そんなことゝは知らぬながら罪なことをしたものである。射的場の芝地に下りつくと紳士は俄にハアーハアーハアーと笑ひ出す。吾も笑ひ出す。ヴィナス、アドニスの二神が直に道を吾々に譲らなかつた。理由を紳士は面白さうに繰り返へしては笑ふこゝで紳士と別れをつける。

別れる際二人は件の凹處を命名してヴィナスの岩屋と呼ぶ。若し現筆者の名が後世に世界的に轟く日にはこの挿話と命名とが永遠に傳はるであらう。文豪スコットの如き名筆を有する人が若しこの記事を讀む日には想像の魔術によつていつ

かはローマンズの「シーン」としなにとも限らない。さても面白き經驗をしたものである。明治維新の際武士が命を賭して白人の軍營に訪れて見ると豈圖らんやウォーター・決戦の前日に於けるウエリントン將軍のその如く白人士官の群が舞踊行樂の真最中であつたので、死を效す程の殺氣がどこへやら消え開いた口が塞がらなかつたと云ふ。死を決せぬ旅行者が眼前これに類したことを見るのは夕暮時のハイド・パークやリーセント・パークさてはリッツモンド・パークである斯うしたことが議會の問題となつた時「彼等にこれを禁止するまでに先づ彼等に家を與へよ。その他は教育家宗教家の教に待て」と云ふのが決議案であつた。やがて僧職教育者の全國的大會が開かれ連日協議の結果、宣傳をすると同時に國民自體の自尊心を望むと云ふより以外に何等の結論を得なかつたのである。斯んな問題を此處に論ずる必要もないが、比較的律儀な東邦國から來た者の眼には最初の程は言語に絶する驚愕である。倫敦市中を夜の十一時頃に散步すると高莊なる建物の隅に秘んで盜間を恥づる行爲をなす者を見受けリーセント・パークのプリムローズ・ヒルやリッツモンドの草原に二脚の雌鹿雄鹿を見ながら垣外に警戒佇立せる查公に同情したことは幾度であつたであらう。ホテルの屋上庭園やキネマの特別席にはうすぐらい *Counting nook* と稱せらるゝ處を特設してゐる。最近北米合衆國シカゴ市に新建築の大ホテルには *Counting nook* の數多きことを以て客を多く集めんと腐心してゐるとは、外字新聞の報導する處である。故國にあ

る帝國ホテルなどに果して Courting nook なるものを特設しあるや否やを知らない。舞踊の輸入、斷髮の輸入、短袴の模倣、遂には女權擴張が極度に達した點、或は Courting nook を自然の戶外や盛り場に求める日が来るのも近い將來のことであらう。

やつしこの山の名を Arthur's Seat と云ふ。中世物語に有名な傳説的英雄の王様であつて幾多の詩や物語の中心題目となつてゐる King Arthur の玉座及びそれに侍つた圓卓 (Round Table) の騎士からその名をつけたのである。King Arthur と云ふはその周圍の騎士等の諸種の武勳をはじめ、西洋の英雄豪傑には欠く可からざる美しく氣高き女性にからまるローマンスを想像する。白人國の小供は既に小學校時代から斯うしたローマンスを聞かされてゐる。田舎で往々見らるゝが如く結婚披露の席に男女席を同じくせすとの主旨に基づき、招待客の夫婦席と目とを異にして食卓に就かしめる程の矛盾者も亦困つたものだが、さりとてヴィナスの横行も亦醜

なものである。アーサス・シートのヴィナス・ケーズは勿論のこと白人國の公園や野外は悉く Courting nook である。異邦人の手前、蘇國人がヴィナスの所業を見兼ねての一句 What a shame! こそ自分には終生忘れられぬ警句である。

近來フロイド一派の精神分析が流行し、小説またこれを主調として諸種の心理行爲を臆面もなく記録して新文學なりと讃仰する。彼等の云ふが如く人間たりとも動物に相異ないが人間には表にすべきことと裏にすべきこととがある。表裏ある人間を蔑むにも理由があるが、表裏なき露骨なる人間をいやしむにも理由がある。ローマンスの Arthur 物語は現代の讀者に何を教ふるや。抑もアーサア物語を讀む今日の讀者は何を面白しと思ふや。既に世に知れ亘つたこの物語を今再び新らしき目で眺めて見たい。山頂のアーサアス・シートの眺望を物語のアーサアシート of the 概見とは如何程の差があるが。岐路に走るやうではあるが述べて見たい。

第九卷第三號北日本の聚落(一) 正誤

誤 正

三四頁上段六行目、九州地方 山陰地方

第九卷第四號北日本の聚落(二) 正誤

五五頁下段六行目、少くなく 少くなつて

五六頁上段終より四行目柿茸、以下「には見られるがわら茸」脱落

五六頁下段三行目兩落 雨落

五九頁上段終より三行目傳説 傳統